

【原著】

TOEIC 受験に向けた短期学習支援 プログラムの効果について

ラットソングリフィス 佑加理, ジョーダン スヴェン

Effectiveness of an Intensive TOEIC Training Program

Yukari Rutson-Griffiths and Jordan Svien

概 要

広島文教大学 Bunkyo English Communication Center (BECC) の Self-Access Learning Center (SALC) では、2020年度と2021年度に、TOEIC のスコアアップを目指す学生を対象に短期学習支援プログラム、TOEIC Training Program を実施した。4週間に亘るこのプログラムでは、1時間程度の個別アドバイジングセッションを週に1回行い、TOEIC のパートごとの特徴や解き方の方法、学習方法などを指導した。また、毎回のセッションで翌週までの学習計画を一緒に立て、参加者の自律学修を促した。本論では、プログラムの実施内容とその効果検証結果を述べる。プログラムの効果検証には参加者の学習成果の測定とアンケートによる調査の2通りの方法を採用した。学習前後の模擬試験結果を検証したところ、両年とも平均にして学習後の問題正答数に増加が見られた。また、2020年度における TOEIC 学内試験の結果を参加者と非参加者で比較したところ、前者のスコア伸長が有意に大きいことが分かった。さらには、1年生の TOEIC テスト結果を BECC 独自の英語運用能力テストの結果に突き合わせて行ったら、参加者と非参加者のスコア比較検証からも、参加者のスコアに有意な伸長が見られたことから、このプログラムの有用性が示唆された。また、プログラム終了後のアンケート調査においても、多くの参加者にとって、学習量を確保することや、自身の英語力を知ること、スコアアップの方法を学べた点等においてプログラムが役立ったとする結果となり、プログラムの有用性を支持している。最後に、本研究の課題について述べる。

Abstract

In 2020 and 2021, the Self-Access Learning Center (SALC) of Hiroshima Bunkyo University's Bunkyo English Communication Center (BECC) implemented a short-term learning support program, the TOEIC Training Program, for students aiming to improve their TOEIC scores. Participants met individually with Learning Advisors for one hour of guided learning per week over a four-week period to learn the characteristics of each TOEIC section, how to tackle its questions, and how to best study for it. In addition, in each session, advisors and students made a personalized study plan for the upcoming week to encourage autonomous learning. This paper describes the contents of the program and verifies its effectiveness. Two verification methods were adopted: measuring the learning outcomes of the participants and conducting a

questionnaire survey. Participants' post-program mock test scores increased on average over both years of the program. Furthermore, when comparing pre- and post-program on-campus TOEIC exam scores, 2020 program participants' TOEIC scores increased significantly over their non-participant peers. Likewise, in comparing the post-program on-campus TOEIC scores of first year students with the results of the BECC's original English proficiency test, program participants' TOEIC scores were found to be significantly higher than that of non-participants, suggesting the effectiveness of the program. In addition, in the post-program questionnaire, it was found that the program was useful for many participants in terms of securing the amount of learning, knowing their own English proficiency, and learning how to improve their scores. Finally, some research limitations will be discussed.

1. はじめに

自律的な英語学習を支援し、さらには学習者の自律性を涵養する場として広島文教大学 Bunkyo English Communication Center (以下、BECC) における Self-Access Learning Center (以下、SALC) は、これまでに多岐にわたる教育支援を行ってきた。英語学習と一口に言っても、学習者の習熟度やニーズ、関心等により、学習の目的や目標、さらに学習内容や形態はそれぞれ異なる。SALC では専属のラーニングアドバイザーが2人常駐し、個別学習相談 (通常、アドバイジングセッションと呼ぶ) や SALC 独自に行う教育プログラムを通して学習者一人ひとりにあった学習支援を提供している。

SALC が主催した教育プログラムの近年の事例として、2018年度と2019年度に行った Independent Learning Program (自律学習プログラム、以下、ILP) が挙げられる。これは、参加者の自律性を促すことを目的とした、希望者対象の期間限定プログラムであった。参加者たちには、グループワークショップにおいて学習の振り返りや目標設定を行う活動や、SALC にある教材を利用した学習方法を実践の中で学ぶ機会が与えられた。さらに、その後の2回の個別アドバイジングセッションでは、ラーニングアドバイザーと一緒に学習計画を立て、数週間に亘り、学習者自身が主体となって学習を進めていった。こうした一連の学びを通して、参加者たちが、自律学習に必要な学習スキルや内省の重要性を理解し、さらに自身の学習に必要な学習教材や学習方法を選びながら、プログラムが終了した後も主体的な学びが実践できるようになることを期待した。また、このプログラムを実施するにあたって得たノウハウは、後に SALC で行う教育プログラムの手がかりとなった。

2020年度と2021年度においては、短期間で The Test of English for International Communication (以下、TOEIC[®]) のスコアアップを図る学習支援、BECC TOEIC Training Program を実施した。TOEIC は就職活動に有利になることや、本学では学内試験 (TOEIC IP テスト) が定期的実施されていること、グローバルコミュニケーション学科では受験が必須となっていることから、高い関心を持っている学生が数多くいる。通常のアアドバイジングセッションや普段の学生とのやりとりの中でも、毎年多くの TOEIC 受験や学習方法に関する相談がラーニングアドバイザーのところへ寄せられる。相談内容は多岐に渡り、TOEIC のことをあまり知らない学生や、漠然とスコアアップを望んでいる学生、高得点を目指すためにセクションごとの解き方のコツや役立つ教材を知りたいという学生など、様々である。こうした学生の高い関心に答えるべく、個別学習支援やこれまでに実施したプログラムのノウハウを活かした SALC 独自の教育支援が形となったのが、TOEIC Training Program であった。このプログラム

TOEIC 受験に向けた短期学習支援プログラムの効果について

では、教育プログラムにアドバイジングセッションを取り入れて実施した ILP を参考に、学習者とアドバイザーが二人三脚で学習の舵を取る形となった。

2. プログラム実施内容

これまで、TOEIC Training Program は、2020年度後期に1回（2020年11月6日から12月21日の期間）、2021年度前期に1回（2021年6月7日から7月7日の期間）の計2回実施した。実施内容の詳細を下記に記す。

2.1 プログラムの共通目標

本プログラムでは、個別トレーニングを通して TOEIC の特徴に加え、各パートの解答方法や学習方法を指導したり、学習の振り返りや学習の計画を支援したりすることから、短期間で TOEIC のスコアアップを目指すことを目的とした。実際にプログラムの宣伝にも掲げ、各参加者との間でも共通の目標としたのは、4週間の集中学習で TOEIC のスコアを50点上げることである。学習効果の検証を扱う箇所で後述するが、TOEIC 受験については全ての参加者に対して必須ではなかったことから、プログラム終了直後のテストの受験を予定していない、もしくはプログラム開始以前に未受験であった参加者がいた。そういった参加者に対しては、学習の前後で行う模擬試験の学習効果測定において、今回は単純に1問5点と計算し、事後テストの正答数を10問上げることが目標とした。また、このプログラムを通して、自身の得意不得意を確認し、自律学習において必要なスキルを身につけてもらうこともプログラムのねらいであった。

2.2 宣伝方法

プログラムの宣伝ポスターを作成し、BECC 内や学内の就職課に掲示するほか、BECCが行っている英語の授業内で宣伝を行った。また、学内においてオンライン授業を実施する際に Microsoft Teams を利用していることから、SALC 独自の Teams クラス「Online SALC」（2020年度後期に運用開始）も広報ツールとして活用した。

2.3 ICT を用いた参加申し込みシステム

通常、ラーニングアドバイザーとのアドバイジングセッションは、ホームページ作成ツール Wix で作成・管理している SALC 専用ページを介しオンラインで予約できるようになっている。今回のプログラムも参加者の利便性を考慮し、オンラインでの申し込みを可能とした。また、2021年度前期の実施に当たっては、TOEIC Training Program 専用の予約ページを設け、希望者は案内ページでプログラムの詳細を確認してから、参加申し込みができるようにした（図1-2参照）。通常のアドバイジングセッションの予約ページとは別に特設ページを設けたことで、学生には分かりやすく、主催する側にとっては管理しやすくなった。

2.4 参加者

2020年度は、教育学科4人、グローバルコミュニケーション学科10人の計14人がプログラムに参加した。このうちの9人は1年生、1人は2年生、4人は3年生であった。2021年度においては、参加者数を10名に限定した（各ラーニングアドバイザーに5名）。内訳は、教育学科の学生3人、心理学科の学生1人、グローバルコミュニケーション学科の学生6人であった。こ

2021年度前期BECC TOEICトレーニング

【結果を締め切りました】2021年度前期BECC TOEICトレーニング 4週間でTOEICのスコアを50点アップする短期集中型プログラム



図1 TOEIC Training Program 参加申し込みメインページ (左)

図2 TOEIC Training Program 日時選択ページ (右)

のうち7人が1年生，1人が2年生，2人が3年生であった。表1は，両年の参加者の学年および学科別の内訳を示している。

表1 2020年度と2021年度のTOEIC Training Program 参加者学年学科別内訳

学年	教育学部 教育学科		人間科学部			
	初等教育専攻	中等教育専攻	人間福祉学科	心理学科	人間栄養学科	グローバルコミュニケーション学科
1	2	2	0	0	0	12
2	0	0	0	1	0	1
3	3	0	0	0	0	3
4	0	0	0	0	0	0

2020年度は後期にプログラムを実施したため，14人の参加者のうち11人がプログラム開始前である同年の7月にTOEIC 学内試験を受験していた。2021年度はプログラムの実施が前期であったため，10人のうち2人のみが前年12月に実施されたTOEIC 学内試験を受験しており，残りの8人のプログラム参加者のうち6人がプログラム終了後の2021年7月に初めてTOEICを受験した。

2.5 スケジュール

2020年度，2021年度ともに，4週間に亘ってプログラムを実施した。参加者たちには，アドバイザーとの個別指導セッションを1週間に1回受講してもらい，計4回のトレーニングを受

TOEIC 受験に向けた短期学習支援プログラムの効果について

けてもらった。各セッションでは TOEIC のパートごとの特徴や解答方法、学習方法などを伝授し、翌週までの自主学習計画を立てた。また、両年ともに初回のセッションまでに Educational Testing Service が出版する『公式 TOEIC[®] Listening & Reading 問題集』シリーズ（以下、公式問題集）を用いて学習者自身の都合の良い時に模擬試験を受けてもらうことを必須とした。学習事後テストとしての模擬試験については、2020年度は任意、2021年度は必須とした。プログラムのスケジュールを表2に記す。

表2 TOEIC Training Program のスケジュールと内容

	参加者とのやりとり・セッション内容	セッション後の 自主学習内容
事前準備	対面やオンラインによる参加者とのやりとり <事前準備> コミュニケーションツール Moxtra（モクストラ）もしくは Showbie（ショービー）の設定、語彙学習アプリ Quizlet（クイズレット）の設定 <自主学習> 公式問題集を用いた事前テスト（模擬試験）を行い、結果をアドバイザーに報告	
1週目	<セッション1の内容> - 模擬試験結果のフィードバック - 目標設定 - 受験や学習のコツ - 時間配分やマークシートの記入方法について - TOEIC パート1の特徴や解き方の方法 人物や物の写真を見て描写文を予測する、ひっかけに惑わされない等 - TOEIC パート2の特徴や解き方の方法 設問パターンを理解する、疑問詞疑問文の場合は最初の語を聞き逃さない、様々な答え方を知る等 - 学習計画	セッション1で 計画した学習
2週目	<セッション2の内容> - 1週目の学習内容の振り返り - 質問の受付 - 自律学習を成功させるためのヒント - TOEIC パート3の特徴や解き方の方法 設問タイプを見極める、設問の先読みをする、選択肢や内容語をスキミングする、設問パターンを知る等 - TOEIC パート4の特徴や解き方の方法 パート3の内容に加え、問題タイプを知る - 学習計画	セッション2で 計画した学習
3週目	<セッション3の内容> - 2週目の学習内容の振り返り - 質問の受付 - 自律学習を成功させるためのヒント - TOEIC パート5の特徴や解き方の方法 問題タイプ（品詞問題、語彙問題、時制問題等）を見極める、部分読みで解ける問題は解く、時間配分に気をつける等 - TOEIC パート6の特徴や解き方の方法 文書タイプを見極める、一文読みで解ける問題は解く等 - 学習計画	セッション3で 計画した学習

4週目	<セッション4の内容> - 3週目の学習内容の振り返り - 質問の受付 - 自律学習を成功させるためのヒント - TOEIC パート7の特徴や解き方の方法 文書タイプを見極める、題や件名等に注目する、設問に目を通す、本文の読み方のコツを知る、リーディングセクション全体の時間配分に気をつける等 - 学習計画	セッション4で計画した学習
事後学習	主にオンラインによる参加者とのやりとり、フォローアップ	公式問題集を用いた事後テスト(2021年度のみ必須)

2.6 セッションに用いた自作教材

SALC 内にある TOEIC の問題集や参考書を用いるほか、ラーニングアドバイザーが独自に作成したプリントを毎回の授業で使用した。自作教材では、TOEIC の各セクションの特徴や解き方のコツを紹介し、一般的な自主学習や学習管理にも応用できるアドバイスを載せた。また、毎回のセッションのはじめと終わりに「TOEIC スコアアップの道のり」と称して、プログラム完了までの到達度をグラフにして可視化することにより、参加者のモチベーション維持を図った(図3)。2021年度には、プリントや Online SALC 内の TOEIC 専用チャンネルにてパートごとの学習に役立つウェブサイトやアプリ、配信動画などを紹介し、オンライン教材を活用しながら自宅でも学習が十分できるよう配慮した。

TOEIC のスコアアップの道のり、パート7

1. TOEIC スコアアップの道のり



今まで頑張ってきたトレーニングも今週で最後です。この時点でプログラムの7割以上達成です！

図3 4週目のセッションで用いた自作プリント(到達度グラフ部分)

2.7 ICT を活用した学習計画と進捗状況の共有

SALC では、日頃から学生とのコミュニケーションや学習支援を円滑に行うために、様々な ICT 技術を活用している。とりわけ、アドバイジングセッションにおいては前述の Teams のほか、Moxtra(2020年度使用)、Showbie(2021年度使用)などのオンラインツールを、自作教材の共有や学習のモニタリング、セッション前後のフォローアップなど、非対面の学習支援に活用している。TOEIC Training Program においても、アドバイジングセッションで通常使用している学習カレンダー(図4)を用いて学習計画を立て、Moxtra や Showbie でアドバイザーと計画や進捗状況を共有できるようにした。プログラム中においては、参加者が毎回のタスクを完了する度に Moxtra もしくは Showbie のカレンダーに完了のチェックを入れることで、ラー

TOEIC 受験に向けた短期学習支援プログラムの効果について

ニングアドバイザーに通知がくるようにした。学習が計画通りに行っていない時はもちろん、学習が順調に行っている時においても定期的にアドバイザーがコメントを送るようにして学習をモニタリングした。また、度々グループ全体にメッセージを送り、おすすめの学習教材やサイト等を紹介した。

No. _____						
名前 Hanako Hiroshima		目標 2ヶ月で TOEIC100 点アップ			学習期間 7/1~7/31	
学習活動 ① Quizlet で単語学習						
② TOEIC の問題集 (「はじめてでも大丈夫! TOEIC 問題集」)						
Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat	Sun
		7/1	2	3	4	5
		① 20分 ② pp. 8~13	① 20分	① 20分 ② pp.14~17	① 20分 ② pp. 18~25	

図4 学習カレンダー (例)

2.8 ICT を活用した語彙学習

プログラムでは、TOEIC の頻出語彙を効率よく学習できるよう、Quizlet という語彙学習アプリを推奨した。また、2021年度においては、セッション中や、Teams や Moxtra、Showbie などのオンラインコミュニケーションツールを利用して、単語学習に使えるその他の無料アプリもいくつか紹介し、参加者それぞれに学習しやすいツールを選んでもらった。

2.9 個々の学習歴や習熟度に合わせた支援

プログラム開始時における参加者たちの習熟度や学習歴、TOEIC に関する知識は様々であった。そこで、自作プリントはどの参加者にも対応できるよう作成したこと、また使用する市販教材や学習内容を、個々の参加者に合わせて調整したことにより、それぞれの習熟度に合わせて無理なく学習計画を立てることができた。また、学習内容で分からなかったところは、各セッションや、Teams や Moxtra、Showbie などのチャット等でアドバイザーに質問できるようにした。

2.10 非対面による学習支援

プログラムを実施した期間においては兩年とも、新型コロナウイルス感染症対策により、セッションをオンラインで行う期間が生じた。大学の授業が対面形式で行われている期間のトレー

ニングセッションは、対面形式かオンライン形式のどちらかを参加者が選択できるようにした。2020年度は12月半ばに正課授業のほとんどがオンラインに切り替わったことを受け、TOEIC Training も全てオンラインで行うことになったが、もともと個別指導の形式をとっていたこと、ICTを活用していたことで、非対面でも学習指導・支援が継続できた。2021年度においては、プログラム開始時に既に大学の授業がオンライン形式で展開されていたことを受け、セッションも全てオンラインでのスタートとなった。その後、対面授業が再開になり、参加者たちには対面形式かオンライン形式かを選択してもらった。ほとんどの参加者が対面のセッションを希望したが、中には本人の希望により全てのセッションをオンラインで行った参加者たちもいる。セッションは全て個別対応であったため、指導する上での困難さはさほど感じられなかったが、参加者たちの中には、対面授業がないために大学へ登校する機会がなく、SALCの教材に容易にアクセスできないことから、学習教材を入手することに難しさを感じた参加者もいた。

2.11 プログラム終了後の支援・対応

参加者へは Teams や Moxtra, Showbie などの ICT ツールや通常のアドバイジングサービスを利用し、任意で継続して学習支援が受けられるようにした。また、担当のアドバイザーから全てのセッションを修了した参加者に対し修了証を送った。

3. プログラムの効果検証

プログラムの効果を検証するため、本研究では参加者の学習成果の測定とプログラム終了後にアンケート調査を実施した。以下、その調査方法と結果について述べる。

3.1 TOEIC のスコア比較

参加者の学習成果を測定する方法として、まず学習の事前事後に行った模擬試験の結果を比較する方法と実際に学内で行われた TOEIC テストの結果を学習前後で比較する方法を採用した。模擬試験を用いた学習成果の検証では、リスニングセクション100問とリーディングセクション100問の計200問のうち、正答数を比較対象項目とした。実際のテストで50点のスコアアップを目標としていたことから、プログラムでは単純に1問5点と計算し、事後テストで10問多く正解することを目指した。

表3は、2020年度のプログラム参加者のうち、事前テストと任意であった事後テストの両方を行い、さらに本検証への協力を同意した9人の参加者の結果を示している。9人中5人の正答数が増加し、そのうちの4人は15ポイント以上を伸ばし目標値の+10を達成した。素点（正答数）の増加の平均と中央値は、それぞれ6.1ポイントと8ポイントであった（最大値：23、最小値：-23）。

表3 2020年度プログラム参加者の模擬試験の結果

事前テスト正答数				事後テスト正答数			
平均	中央値	最大値	最小値	平均	中央値	最大値	最小値
104.2	108	129	84	110.3	116	135	68

また、プログラム実施前の2020年7月と実施後の同年12月の両月に TOEIC 学内試験を受験

TOEIC 受験に向けた短期学習支援プログラムの効果について

した学生のテスト結果を、TOEIC Training 参加者と非参加者で比較し、プログラム参加者の学習成果を検証したところ、参加者は平均で67点 TOEIC のスコアを上げたのに対し、非参加者（TOEIC Training Program には参加していないが、ラーニングアドバイザーから何かしらの TOEIC 受験に関する指導を受けた学生を除く）の伸長は平均にして約25点であった（表4）。対応のない t 検定（両側検定）（Graphpad, 2021）の結果、 $p=0.0430$ 、95%信頼区間1.33-82.39となり、統計的に有意な差が見られた。

表4 2020年7月と12月の TOEIC 学内試験の結果比較

	2020年7月の試験		2020年12月の試験		テスト得点の差	
	平均	中央値	平均	中央値	平均	中央値
TOEIC Training Program 参加者	393.5点	380.0点	460.5点	435.0点	+67.0点	+55.0点
TOEIC Training Program 非参加者	362.6点	347.5点	387.8点	380.0点	+25.1点	+32.5点

2021年度前期においては、7月17日に学内で TOEIC が実施されたが、前述した通り参加者10人中7人が1年生であり、入学後初めての TOEIC 受験であったことから直接比較できる項目がない。プログラム前後の TOEIC 学内試験（2020年12月と2021年7月の両方）を受験した2人の参加者のスコアを確認すると、1人のスコアはプログラム前のスコアを60点上回り、計5回の受験で自己最高のスコアとなった。もう1人は計5回の受験のうち2番目に高いスコアを取得したが、前回の最高スコア（2020年12月に受験したテストであり、それ以前にラーニングアドバイザーから TOEIC 関連の指導を受けていた）から25点減少した。

表5は、2021年度のプログラム参加者の模擬試験結果を示している。10人中7人が正答数を上げ、プログラム参加者全体の増減範囲は+23から-4であった。素点の増加の平均と中央値は、それぞれ9.9ポイントと10ポイントであった。10人の参加者のうち5人は、プログラムで掲げた+10の正答数という目標を達成し、残りの参加者数のうち2人は目標の点数から-3ポイント以内に収まった。

表5 2021年度プログラム参加者の模擬試験の結果

事前テスト正答数				事後テスト正答数			
平均	中央値	最大値	最小値	平均	中央値	最大値	最小値
103.8	96	163	64	113.7	106	162	75

3.2 BET の結果を用いた学習成果の検証

プログラム参加者の学習成果を測定するためのもう1つの指標として、プログラム実施後の1年生の TOEIC スコアを、入学時（4月）に受験した BECC 独自開発の文教イングリッシュテスト（BET）（Bower et al, 2014）のスコアに突き合わせ、プログラム参加者と非参加者のスコアを比較する方法を採用した。とりわけ、2021年度においては参加者10人中7人が1年生であり、1人を除く全員がプログラム終了直後（2021年7月）の TOEIC 学内試験を受験したことから、この検証方法が有用であると考えた。プログラム実施前の TOEIC スコアが欠如しているがために、プログラム実施後のスコアのみを用いて参加者・非参加者間で比較検証することは、参加者の受験前の潜在的な習熟度差を考慮に入れず、歪んだデータを示す恐れがある。

そこで、類似または同一の BET スコアを持つ受験者間で TOEIC と BET のスコアを用いて比較することが、プログラムの効果検証に役立つと考えた。

2020年度の1年生のコホートは68人で、内訳はプログラム参加者9人、非参加者59人である。このうち、4月実施の BET を受験していない学生（非参加者1人）、TOEIC Training Program 外でラーニングアドバイザーによる TOEIC 関連の指導を受けた学生（非参加者2人）、BET 結果の研究使用に同意していない学生（参加者1人、非参加者1人）は本検証から除外した。2021年度のコホートは41人で、内訳はプログラム参加者6人、非参加者35人である。前年度と同様に、非参加者のうち2人はラーニングアドバイザーによる TOEIC の指導を受けたことにより検証対象者から除外した。

表6は各年のコホート内でのプログラム参加者の BET と TOEIC の個人順位及び参加者・非参加者別の平均を示すものである。2020年度においては、2020年12月の TOEIC 順位を入学時の BET 順位と比較すると、プログラム参加者の平均順位がおよそ10位上昇したのに対し、非参加者の平均順位はおよそ2位下降した。同じく、2021年度の参加者の TOEIC 順位は平均で7.3位上昇し、非参加者は1.5位下降した。2年間を通してみると、参加者のうち1人のみに順位の上昇が見られた。また、2020年度の順位上昇が見られなかった参加者2人は、BET の順位がすでに上位4位内であったためそれ以上の順位の上昇は困難であったと考えられる。2020年度、2021年度どちらにおいても、プログラム参加者はコホート全体の BET 平均順位よりも高い水準で学習を開始したが、2020年度に比べ、2021年度の参加者の平均順位の方がコホート全体の平均に近いものであった。

表6 BET 及び TOEIC における参加者の個人順位と参加者・非参加者別の平均

2020年度のコホート (n=63)				2021年度のコホート (n=39)			
参加者 (TOEIC 対 BET 群の順位順)	BET 群 の順位	TOEIC 群 の順位	テスト結果の 順位差	参加者 (TOEIC 対 BET 群の順位順)	BET 群 の順位	TOEIC 群 の順位	テスト結果の 順位差
1	31	9	22	1	24	5	19
2	31	14	17	2	22	7	15
3	24	9	15	3	32	20	12
4	11	1	10	4	9	3	6
5	15	6	9	5	12	7	5
6	41	36	5	6	5	18	-13
7	2	2	0	参加者平均	17.3	10.0	7.3
8	4	4	0	非参加者平均	20.1	21.5	-1.5
参加者平均	19.9	10.1	9.8				
非参加者平均	32.6	34.7	-2.1				

図5から図8は BET と TOEIC のスコア散布図であり、黒色はプログラム参加者を、灰色は非参加者を示している。図5（2020年度）と図7（2021年度）では、横軸と縦軸はそれぞれ BET スコアと TOEIC スコアを示し、各縦軸の目盛線は TOEIC スコア50点を表している。参加者と非参加者の傾向線を比較すると、両年において、参加者の方が BET スコアに対し高い TOEIC スコアを獲得したことを示している。2020年度（図5）では、BET スコアの中間に位置する参加者が非参加者をおよそ50点上回ったが、高得点群を見ると差は150点近くにも拡大し

TOEIC 受験に向けた短期学習支援プログラムの効果について

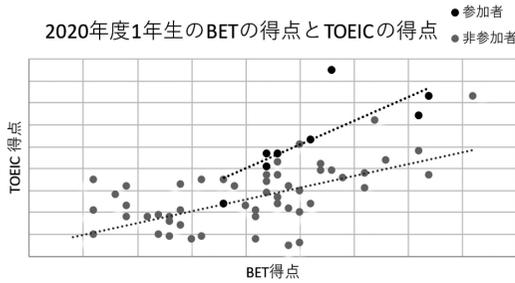


図5 2020年度1年生の BET の得点と TOEIC の得点 (左)

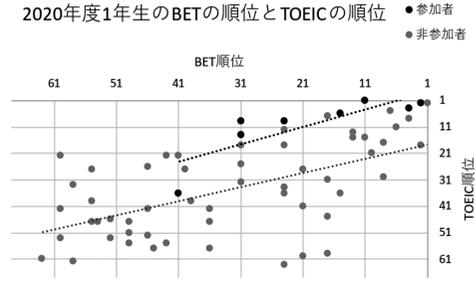


図6 2020年度1年生の BET の順位と TOEIC の順位 (右)

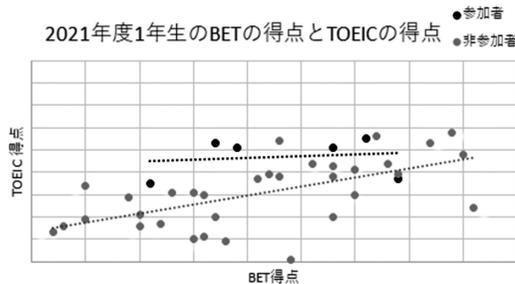


図7 2021年度1年生の BET の得点と TOEIC の得点 (左)

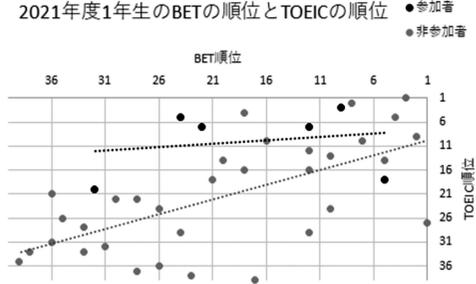


図8 2021年度1年生の BET の順位と TOEIC の順位 (右)

た。図7が示すように、2021年度では逆の傾向が見られた。BET 高得点群（傾向線の右端）の参加者は、非参加者に対し TOEIC において約40点の差をつけた。また、BET スコアが比較的 low かった参加者（傾向線の左側）は、平均にして約110点非参加者と差をつけた。図6（2020年度）および図8（2021年度）は、右上隅の1に向かって両試験ともに高順位となるよう、コホート内の順位を散布図で示したものである。図5および図7と同様、プログラム参加者の傾向線（黒）は BET スコアと正の相関となり、BET 全ての順位群において TOEIC の方が全体的に高順位となっていることが分かる。2021年度のデータ（図8）においては、これが特に低順位群で顕著に見られ、傾向線は BET 順位の低い参加者が TOEIC で約15位高くなったことを示している。

この BET から TOEIC におけるスコアの伸びが統計的に有意であるかどうかを検証するために、TOEIC スコアを BET スコアで割り、各学生の TOEIC と BET のスコア比を算出した。この2つのテストでは異なる採点方式（BET は77点満点、TOEIC は990点満点）を採用しているが、比率を取ることで異なる2つのテストスコアから導き出した一定値となり、統計に利用できるようになる。この比率を用いて、2020年度の場合は2020年12月に TOEIC を受験した1年生、また、2021年度の場合は2021年7月に TOEIC を受験した1年生を対象に学習成果を検証した（表7）。

対応のない両側 t 検定（Graphpad, 2021）を用いて p 値を測定すると、2020年度のデータセットは $p=0.0047$ で統計的に非常に有意であったが、2021年度においては $p=0.0722$ となり、統計的有意性は見られなかった。これについては、2021年度の参加者と非参加者の平均 TOEIC/BET 比の差が、2020年度に比べわずか0.3ポイント小さかったことから、2020年度と比較して2021年度の全体的なサンプルサイズが小さかったことが主に影響した可能性があると考えられる。また、

表7 1年生のTOEICとBETの得点の比率を用いた対応のない2群の両側検定

コホート	参加者		非参加者		統計的有意性			95%信頼区間	
	学生数	TOEIC/BET 比率平均	学生数	TOEIC/BET 比率平均	比率平均の 差異	P 値	結果	最小値	最大値
2020年度	8	9.112	55	7.436	1.676	0.0047	統計的に 非常に有意	0.533	2.819
2021年度	6	9.233	33	7.858	1.376	0.0722	統計的に 有意ではない	-0.131	2.882
統合	14	9.164	88	7.594	1.57	0.0008	統計的に 非常に有意	0.673	2.467

プログラム外でラーニングアドバイザーからTOEICに関する学習指導を受けたために検証対象者から除外した学生2人をプログラム参加者として含めると、p値は統計的に有意な0.0314、95%信頼区間は0.137-2.773となった。両年のデータセットを組み合わせるとp値は0.0008になり、非常に有意な結果となる。したがって、入学年の4月に受けたBETのスコアと比較すると、参加者1年生のプログラム終了後のTOEICスコアが、非参加者のスコアより大きく増加したことを示しており、この検証においてもプログラムの有用性を示唆する結果となった。

3.3 アンケート調査結果

プログラム終了後に参加者に対して任意回答のアンケート調査を行った。アンケートでは、まず、プログラムの評価項目として、6つの質問に対しそれぞれ「強くそう思う」、「そう思う」、「そう思わない」、「全くそう思わない」の4段階でもっとも当てはまる選択肢を回答してもらった。

表8は、2020年度の参加者14人のうち9人と2021年度の参加者10人全員を含む19人から得られたアンケートによるプログラムの評価結果を示している。全ての項目において回答者がプログラムに前向きな評価をしていることが分かる。19人の回答者全員が、プログラムが現在の英語力を知ることや、TOEICのスコアアップを図る方法を知ること、学習計画を立てることに役立ったと回答した。1人を除くすべての回答者が、このプログラムがモチベーションを維持する上で役に立ったと回答した。同様に、このプログラムを他の学生に推奨するかという問いに対し、1人を除くすべての回答者が同意し、そのうちの15人が「強くそう思う」と回答した。最後に、2021年度に追加した、プログラムに参加したことによりTOEIC受験に向けた学習量が増加したかという問いに対して、10人の参加者全員が肯定的な回答をし、うち8人は「強くそう思う」と回答した。

表8 2020年度及び2021年度のアンケート結果1 (Q. TOEIC Training Programに関する次の文を読んで、“全くそう思わない～強くそう思う”の4段階の中から当てはまるものを選んでください。)

カテゴリー	強くそう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない
プログラムは、現時点での自分の英語力を知るのに役立った。	74% (2020=56%; 2021=90%)	26% (2020=44%; 2021=10%)	0%	0%

TOEIC 受験に向けた短期学習支援プログラムの効果について

プログラムは、TOEIC のスコアを上げる方法を知る上で役立った。	79% (2020 = 78%; 2021 = 80%)	21% (2020 = 22%; 2021 = 20%)	0 %	0 %
プログラムは、モチベーションを維持する上で役立った。	74% (2020 = 67%; 2021 = 80%)	21% (2020 = 33%; 2021 = 10%)	5 % (2020 = 0 %; 2021 = 10%)	0 %
プログラムは、学習計画の立て方を知る上で役立った。	63% (2020 = 44%; 2021 = 80%)	37% (2020 = 56%; 2021 = 20%)	0 %	0 %
(2021年度のみ) プログラムに参加したおかげで、TOEIC の学習量が増えた。 (もし参加していなかったら学習量は少なかった。)	80% (2020 = N/A; 2021 = 80%)	20% (2020 = N/A; 2021 = 20%)	0 %	0 %
他の学生にもプログラムを勧めたい。	79% (2020 = 89%; 2021 = 70%)	16% (2020 = 11%; 2021 = 20%)	5 % (2020 = 0 %; 2021 = 10%)	0 %

表9は、アンケート調査から見えた参加者が考えるプログラムの役立つ点（複数回答可）を示している。9項目のうち8項目は半数もしくは半数以上の回答者によって選択され、74%の回答者が、毎週の個別セッションを受講することが役に立ったと感じていることが分かる。また、ラーニングアドバイザーが勧めたTOEIC関連の教材や、練習問題や配信動画等のオンライン教材を使用すること、語彙学習にQuizletを利用したこと等も高い評価項目となった。また、2021年度の参加者と前年度の参加者の回答を比較すると、8項目のうち7項目で選択された割合が高かったことから、2年目の参加者の方がプログラムのほとんど全ての側面において肯定的に捉えていることが分かる。この傾向は、学習カレンダーの活用やラーニングアドバイザーの自作プリント、ICTツールを活用したラーニングアドバイザーとのやりとりに関して顕著に見られた。これについては、2021年にMoxtraに取って代わったShowbieに対するの好感度が影響している可能性もあるが、ラーニングアドバイザーが前年度を振り返りプログラムの改善に努めたことが結果として参加者の満足度につながったのかもしれない。

表9 2020年度及び2021年度のアンケート結果2 (Q. プログラムのどんな点が役に立ちましたか? 該当するものを選んでください。(複数選択可))

項目	選択された割合	項目	選択された割合
毎週のTOEIC チュートリアル もしくはレッスンを受けること	74% (2020 = 67%; 2021 = 80%)	自分の得意不得意分野を 確認すること	58% (2020 = 56%; 2021 = 60%)
アドバイザーが勧めてくれた TOEIC の市販教材、または SALC 内教材を使うこと	68% (2020 = 67%; 2021 = 70%)	学習カレンダーを使うこと	58% (2020 = 33%; 2021 = 80%)
Quizlet で英単語を学ぶこと	63% (2020 = 56%; 2021 = 70%)	Moxtra/Showbie/Teams で アドバイザーと連絡を 取り合うこと	58% (2020 = 33%; 2021 = 80%)

(2021年度のみ) アドバイザーが 勧めてくれた TOEIC の オンライン教材を使うこと	60% (2020=N/A; 2021=60%)	毎回のセッションで使用し たオレンジ色のプリントを 使うこと	37% (2020=11%; 2021=60%)
TOEIC 公式問題集を使って 模擬試験を受けること	58% (2020=67%; 2021=50%)		

4. お わ り に

前述したように、SALC ではこれまでに、異なる習熟度やニーズ、興味、関心を持った様々な学習者を対象に学習支援を行ってきた。とりわけ、TOEIC については特定の分野の就職活動で有利になること、学内で試験が受けられること、また学科によっては受験が必須となっていることから、通常のアドバイジングセッションや普段からの学生対応においても非常に高い関心が窺えた。この状況を受け、SALC のアドバイジングサービスやノウハウを生かして TOEIC 対策支援ができないかと模索した結果、個別指導を取り入れた短期集中型プログラムを実施し希望者に学習支援を行うに至った。プログラムにおける個別セッションでは、これまでにラーニングアドバイザーが普段の学習相談で行ってきた指導内容を、自作教材や Online SALC、ICT コミュニケーションツールを駆使し伝授することができ、まさに SALC 独自の教育体制を生かした学習支援ができたのではないかと考える。

本論では、2 回に亘り実施したプログラムの効果を 2 つの観点から検証している。1 つめは、プログラム参加者の学習成果を検証すること、2 つ目は、参加者対象に行ったアンケート結果を検証することである。1 つ目の検証方法については、大きく参加者の事前事後模擬試験の結果を比較すること、学内で行われた TOEIC のスコアをプログラム参加者と非参加者の間で比較することであった。模擬試験結果においては、両年とも、事後テストでの正答数が事前テスト結果より平均して高く、2020 年度においては 6.1 問、2021 年度においては 9.9 問の増加が見られた。また、2020 年度実施の TOEIC 学内試験の結果においても、参加者のスコアと非参加者のスコアを比較すると、前者のスコア伸長の平均が後者に比べて有意に大きいことが分かった。また、1 年生の参加者については、TOEIC の得点数を入学時に実施した BECC 独自の英語運用能力テスト BET の結果につきあわせ、プログラム参加者と非参加者の得点数と群順位を比較検証した。その結果、2020 年度のテスト結果においては、参加者のスコアの伸長が、非参加者よりも有意に大きいことが分かった。2021 年度の結果においては、対象者が少人数であることによる影響からか、参加者・非参加者の伸長差に統計的有意差は見られなかった。しかしながら、両年の結果を統合し検証した結果では、参加者のスコアの伸びに有意性が見られる結果となり、プログラムの有用性が示唆された。2 つ目の検証方法であるアンケートにおいても、TOEIC 受験における学習量を確保することや、現在の自身の英語力を知ること、TOEIC スコアアップのための学習方法や受験方法を学べた点等においてプログラムが効果的であったことを示唆する結果となったことから、参加した学生の満足度が窺えるのではないかと考える。

しかしながら、本プログラムが成功を取めたと締め括るには少し慎重にならざるを得ない。プログラムはまだ 2 回しか実施されておらず、参加者総数は両年合わせても 24 人と、統計的に見ても少ないサンプルサイズである。また、前述の 2 通りの検証では、どちらもプログラム有用性を示唆する結果となったが、これらの検証方法には、学習者それぞれに異なる学習態

TOEIC 受験に向けた短期学習支援プログラムの効果について

度や、学習歴、学習に対するモチベーションの度合いや、習熟度の違いなど、つまり学習成果を左右し得るその他の学習要因を考慮に入れていない。今後もプログラムを実施し、参加者の学習成果を積み重ね検証していくことや、過去の参加者たちに対する長期的な追跡調査を行うことが、いかにして英語力や自律性が向上するのか、またその他に関連のある学習要因が何であるかを知る上での手掛かりとなり得るのではないだろうか。今後の課題としたい。

最後に、今回のプログラムが、参加者それぞれの学習に取り組む姿勢の改善や学習スキルの向上の一助となり、さらには参加者自身が、今後もプログラムで学んだことを生かして学習を継続し英語運用能力を高めてもらえれば幸いである。

参 考 文 献

Bower, J., Rutson-Griffiths, A., Sugg, R. (2014). Setting and Raising Standards - the Rationale for, and the Structure of the Bunkyo English Tests. Bulletin of Hiroshima Bunkyo Women's University, Volume 49. Unpaired two tailed t tests were calculated using the GraphPad QuickCalcs Web site: <https://www.graphpad.com/quickcalcs/ttest1> (accessed September 2021).

—2021年9月22日 受理—